



老人クラブ活動

「一日老人ホーム」事業を契機に



置戸陽寿会創立50周年記念式典の様子
＝ 3月24日、中央公民館にて

置戸に老人クラブが発足したのは、「高齢者同士お茶でも飲みながら話し合える場所がほしい」との声を受け、昭和34年に中央公民館事業として「一日老人ホーム」が開設されたことがきっかけです。第一回の6月10日には、和室に、碁、将棋、花札、浪曲スライドなどが用意され、参加したおよそ30人の高齢者が娯楽を楽しみ、親睦を深めました。その後、毎月10日を「一日老人ホーム」と定め、置戸地区の単位婦人会員が交替でお世話役をつとめていました。

昭和35年6月に勝山、同年8月に境野、同年9月に秋田と、それぞれの地区においても一日老人ホームが開設され、置戸地区同様公民館事業の一環として、婦人会協力のもと定期的に憩いの場が提供されるようになりました。しかし、厳寒期の一月、二月などは次第に参加者が減り、いつまでも「お客さん」として、世話を受けているばかりでなく、自主的に運営する組織をつくってはどうかとの気運が高まり、昭和37年に金山惣蔵さん、松

井政治さんたちが中心となって置戸老人クラブが最初に結成されました。

昭和41年にはクラブ名（置戸陽寿会、勝山寿クラブ、境野福寿クラブ、秋田長寿会、拓殖さわやかクラブ）もそれぞれつき、同44年には全町のまとめ役として置戸町老人クラブ連合会が結成されました。その頃から境野老人クラブでは老人運動会を実施していましたが、たまたまこの運動会を参観していた各クラブの役員間で「全町的な行事にしよう」との話がまとまり、昭和46年より各クラブ対抗の高齢者運動会が開かれるようになりました。高齢者運動会と、そのあとの長寿パーティーは、連合会行事の一つとして、現在も引き継がれています。

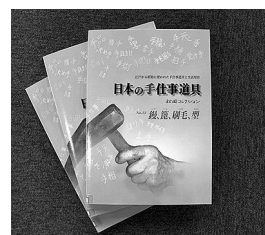
また、ゲートボール大会は人気があり、近隣市町との大会は会場を持ち回りで、健康福祉球技大会として継続されています。

（参照：置戸町史下巻、続置戸町史）



後世に残したい 日本の手仕事文化

どま工房研究員 ^{なか}那珂 琴絵さん



4月1日からどま工房研究員として秋岡コレクションの調査研究を行っている那珂琴絵さん。江別市の出身で、旭川高等技術専門学院進学後、木製家具のデザインと製作に関わる知識を深めていく中で、木工ろくろで器づくりに取り組む置戸町に興味を持ちました。昨年のDOMA秋岡芳夫北海道置戸展にはあいにく来ることができませんでしたが、「今回、モノづくりに関する充実した設備と豊富な資料が揃う置戸町で働く機会に恵まれ、とても感謝しています」と話します。秋岡コレクションについては、「膨大な資料の中には用途不明のものもあると聞いており正直に言って不安もあります」としながらも、「前任者の仕事をしっかり継承し、これまで自分が学んできた知識を活かしながら、日本の手仕事文化を後世に残すための活動を進めていきたいです」と意気込んでいます。